

# 農 作 概 況

## 〔水 稲〕

### 1. 作付の概況

九州における平成16年度の水稲作付面積（青刈り面積控除後）は20万1,900haで、前年に比べて5,100ha（3%）増加した。品種別の作付状況を見ると、ヒノヒカリの割合が依然として高く、九州のうち品種作付面積の約60%を占めている。次いで、コシヒカリが15%で、両品種で75%を占めている（いずれも前年より増加）。

沖縄における水稲作付面積は1,100haで、前年より50ha（5%）増加した。ひとめぼれの作付けが全体の89%（前年91%）を占めている。

### 2. 作柄の概況

九州における平成16年産水稲の収穫量は85万5,800tで、前年に比べて8万9,800t（9%）減少した。これは、作付けが増加したにもかかわらず10a当たり収量が424kgと、対前年差で56kg（比で12%）減少したためである。

九州地域の作況指数は85で、熊本が77、佐賀が80、福岡が83、大分が86、長崎が91、鹿児島が92、宮崎が95であった。このうち早期栽培については、主産県の宮崎県が109、鹿児島県が106であった。また、沖縄の作況指数は90であった。

### 3. 生育の概況

#### 1) 普通期水稲

九州地域では6月の移植後、7月中下旬の高温多照により分けつが旺盛で、穂数は前年より多いないしやや多くなった。このため、一穂粒数がやや少なくなったものの単位面積当たり粒数は前年並みなないしやや増加した。出穂期は生育期間の高温により前年より2～4日早くなった。しかし、出穂期前後に来襲した台風15号（8/19）、16号（8/30）、18号（9/7）により穂ずれ、籽ずれを伴う不稔、子実の発育停止が発生するとともに、

9月の日照不足と高夜温、さらに21号（9/29）、23号（10/20）による倒伏も発生し、全ての県で登熟が不良となった。特に熊本、佐賀、福岡、大分ではヒノヒカリ出穂後まもない時期に来襲した台風16号と18号の強風の影響が大きかったと見られる。熊本、佐賀の海岸部では、さらに潮風害も登熟を著しく阻害した。

このような気象条件による登熟不良は玄米品質の著しい低下を引き起こし、充実不足や乳白米等未熟粒の発生により、一等米比率が高温登熟により低かった前年産（九州全体で49.6%）を大きく下回る27.6%であった。

#### 2) 早期水稲

田植後の高温多照により初期分けつが旺盛となり穂数がやや多くなった。その後、宮崎では5月下旬から6月中旬の多照により一穂粒数がやや多くなり単位面積当たり粒数は前年より多かった。一方、鹿児島では5月中旬の一時的な日照不足により一穂粒数がやや少なくなり、単位面積当たり粒数は前年並となった。出穂期は前年より3日程度早かった。

登熟は主に6月20日に接近した台風6号の影響で一部籽ずれや不稔粒が発生したものの、出穂期の6月下旬以降の高温多照により前年並ないしやや良となった。

なお、沖縄県の1期作では田植期から出穂期にあたる2月下旬から5月中旬にかけて高温で出穂期は4、5日早まったが、生育期間を通した日照不足と登熟期の高温により収量、品質ともに不良となった。2期作では、田植期から収穫期にあたる8月上旬以降11月上旬までの高温寡照傾向に加えて6個の台風により収量、品質ともに著しく不良であった。

### 4. 被害の概況

九州地域の被害総量は27万400tで被害率は26.7%と前年を16.0ポイント上回った。被害種類別に見ると、気象被害が20.8%で前年を15.7ポイント上回り、これは台風16号、18号、21号、23号による倒伏、籽ずれ、海岸部での潮風害、倒伏後の降雨による穂発芽・紋枯病の多発

2004年産水稲の作付面積と収穫量

区 分	作付面積 (ha)	10 a 当たり 収量 (kg)	収穫量 (t)	作況 指数	前年との比較					
					作付面積		10a 当たり収量		収穫量	
					対差	対比	対差	対比	対差	対比
全国	1,697,000	514	8,721,000	98	37,000	102	45	110	942,000	112
九州計	201,900	424	855,800	85	5,100	103	△ 56	88	△ 89,800	91
福岡	42,100	415	174,700	83	1,700	104	△ 68	86	△ 20,400	90
佐賀	29,300	422	123,600	80	900	103	△ 78	84	△ 18,400	87
長崎	14,500	430	62,400	91	300	102	△ 18	96	△ 1,200	98
熊本	42,300	396	167,500	77	1,500	104	△ 95	81	△ 32,800	84
大分	26,200	432	113,200	86	100	100	△ 53	89	△ 13,400	89
宮崎	21,700	462	100,300	95	800	104	△ 2	100	3,300	103
鹿児島	26,000	439	114,100	92	100	100	△ 28	94	△ 6,900	94
沖縄	1,100	281	3,090	90	50	105	△ 46	86	△ 340	90

注) a) 資料：「平成16年産水陸稲の収穫量 平成16年12月1日公表」農林水産省大臣官房統計部。

b) △は減少量を示す。

によるとみられる。また、日照不足と高夜温によるとみられる充実不足・乳白米の発生も影響したとみられる。虫害については平年を0.7ポイント下回った。

沖縄県では1期作でカメムシの発生が多かったが、いもち病の発生は少なく、2期作でコブノメイガの発生が多かったが、カメムシの発生は少なかった。

（九州沖縄農業研究センター水田作研究部 森田 敏）

## 〔麦 類〕

### 1. 作付の概況

九州地域における2004年産の麦類の作付面積は55,012haで、前年（54,959ha）とほぼ同じであった。麦種別では、小麦が35,207ha、二条大麦が18,252ha、裸麦が1,553haで、前年に比べて小麦は1,892ha（5%）増加したが、二条大麦は1,708ha（9%）、裸麦は131ha（8%）減少した。全国の作付面積に占める九州地域の割合は小麦が16.6%（対前年比0.9%増）、二条大麦が49.1%（同1.4%減）、裸麦が30.7%（同2.2%増）となった。

県別では、小麦は大分県を除くすべての県で1～18%増加した。二条大麦は長崎県を除くすべての県で減少した。裸麦は宮崎県を除くすべての県で減少した。

### 2. 生育概況

大豆後では大豆の収穫期が遅れ、播種作業が遅れた場所以外は、おおむね播種作業は順調であった。平均気温は、播種後は高めに経過したが、1月はかなり低くなった。2月以降は再び高く経過したため、出穂は平年並み～3日程度早かった。登熟期は、一部で断続的な雨と強

風により品質が劣化した場所があったが、おおむね良好であった。成熟期は2～5日早かった。

以上の結果、九州全体の作況指数は小麦で110、二条大麦で106、裸麦で86と裸麦を除き良であった。

### 3. 作柄の概況

作柄は裸麦を除き良であった。小麦の作況指数は大分が83の著しい不良で合った以外は、107～116の良であった。二条大麦は全ての県で101～112の平年並み～良であった。裸麦の作況指数は主産県である大分県が76と著しい不良であった。

（九州沖縄農業研究センター水田作研究部 小田俊介）

## 〔カンショ〕

### 1. 作付の概況

2004年度の全国の作付面積は40,300ha（前年より2%増）で、九州は17,400ha（同5%増）であった。全国的には生食用カンショの作付が関東を除いて漸減する中、鹿児島や宮崎県においては、いも焼酎ブームにより焼酎用の作付が前年に比べて約1,000ha（7～8%）増加した。

### 2. 作柄の概況

6月中旬から8月中旬が高温・多照に経過したため、いもはおおむね順調に肥大した。その後、生育後期にかけて相次ぐ台風の襲来等があったものの、九州では単収が前年に比べて5%程度高い2,820kgとなった。収穫量も前年比11%増の491,500tとなった。

鹿児島県では苗の生育は良好であり、苗の活着も4月中旬以降、高温で適雨もあったことから順調であった。茎葉の生育は高温・多照で経過したことから良好で、一部干ばつの影響も見られたが、おおむね前年並みとなった。いもの肥大については、天候に恵まれ、8月中旬までは順調で、その後度重なる台風の襲来と9月の天候不順により、肥大率は低くなったものの、前年より大きくなった。ナカジロシタバ等による葉の食害は軽微であった。以上のことから、10a当たり収量は3,000kgで、前年産を110kg（4%）上回った。また、収穫量は37万8,000tで、前年に比べて3万7,000t（11%）増加した。

宮崎県では、3月から4月にかけて天候に恵まれたことから苗の生育は順調で、挿苗後も適雨があったことか

2004年産麦類の作付面積と収穫量

麦種	作付面積	10a 当たり 収量	作況 指数	前年との比較					
				作付面積		10a 当たり 収量			
				対比 (%)	対差 (ha)	対比 (%)	対比 (%)	対差 (t)	
	(ha)	(kg)	(t)	(%)	(ha)	(%)	(%)	(t)	
小麦	全国	212,600	404	859,900	109	100	400	100	4,700
	福岡	15,300	391	59,800	110	101	200	127	13,100
	佐賀	10,500	399	41,900	116	118	1,590	133	15,200
	長崎	1,040	330	3,430	107	103	30	131	880
	熊本	4,930	359	17,700	116	103	130	118	3,100
	大分	3,360	270	9,080	83	98	△60	105	290
	宮崎	51	271	138	...	100	0	103	4
鹿児島	26	246	64	...	108	2	118	14	
二条大麦	全国	37,200	347	128,900	94	94	△2,300	111	5,600
	福岡	3,950	353	13,900	107	94	△260	138	129
	佐賀	11,000	375	41,300	106	91	△1,100	153	140
	長崎	644	363	2,340	105	110	61	132	146
	熊本	1,710	325	5,550	101	85	△300	123	104
	大分	746	381	2,840	112	91	△73	135	123
	宮崎	30	277	83	...	88	△4	98	86
鹿児島	172	271	466	...	84	△32	144	121	
裸麦	全国	5,060	306	15,500	87	86	△840	98	84
	福岡	285	300	854	...	87	△43	120	104
	佐賀	115	346	398	...	91	△12	159	144
	長崎	347	241	835	...	95	△18	136	129
	熊本	21	329	69	...	81	△5	358	288
	大分	778	249	1,940	76	94	△54	106	99
	宮崎	7	243	17	...	117	1	104	121
鹿児島	0	243	0	...	0	130		0	

注) a) △は減少を示す。

b) 資料は、平成16年11月5日農林水産省公表による。

2004年産カンショ作付面積と収穫量

区分	作付面積	10a 当たり 収量	収穫量	前年産との比較			
				作付面積		10a 当たり 収量	
				対比 (%)	対差 (ha)	対比 (%)	対差 (t)
	(ha)	(kg)	(t)	(%)	(ha)	(%)	(t)
全国	40,300	2,500	1,009,000	600	102	105	67,900
九州	17,400	2,820	491,500	900	105	105	48,400
福岡	225	1,430	3,220	△ 25	90	103	△ 260
佐賀	122	1,950	2,380	△ 1	99	110	200
長崎	644	2,000	12,900	△ 17	97	108	700
熊本	1,270	2,360	30,000	△ 20	98	113	3,000
大分	315	1,900	5,980	11	104	112	810
宮崎	2,260	2,610	59,000	160	108	105	6,900
鹿児島	12,600	3,000	378,000	800	107	104	37,000
沖縄	283	1,980	5,600	△ 5	98	103	△ 70

注) 平成16年産カンショの収穫量（農林水産省統計部 平成16年12月22日公表）に基づいて作成。

ら苗の活着はおおむね良好であった。その後8月上旬にかけて高温・多照で経過したため、茎葉の生育やいもの肥大は順調であった。8月中旬以降は相次ぐ台風や長雨等により日照不足となったことから、肥大は抑えられた。しかし、最終的には10a当たり収量は2,610kgで前年産を5%上回った。また、収穫量も前年産に比べて6,900t（13%）増加して5万9,000tとなった。

（九州沖縄農業研究センター畑作研究部 吉永 優）

## 〔大豆〕

### 1. 作付の概況

本年度の作付面積は全国で136,800haで、前年より15,100ha減少した（前年比90%）。九州では24,000haで前年比93%で前年より1,900ha減少した。これは、2004年度より「新たな米政策」が生産目標数量を配分する方式に変更されたことで、主に水稻などへ作付転換があったためと推測される。県別では、佐賀県の減少が大きく前年比89%（990ha減）であった。なお、沖縄県ではほとんど作付がない。

### 2. 作況の概況

本年は、播種時期にあたる6月中旬から7月下旬まで天候に恵まれ適期に播種が行われ、出芽も良好で、その後も高温・多照に推移したため初期生育は良好で管理作業も順調に行われた。しかし、8月中旬に台風15号が長崎県五島地域を通過し、その後も台風16号、台風18号、台風21号、台風23号が九州管内を通過した。そのため、受精不良、倒伏および茎葉の損傷等が多発し、登熟期も全般に長雨による日照不足等で10a当たり平均収量が76kgと非常に低くなった。福岡県では台風16号、台風18号で県内で倒伏が多発し、台風21号および台風23号で更に倒伏した。また、台風の影響で茎葉の損傷が激しく、近年少なかった葉焼病も多発した。佐賀県でも台風16号、台風21号および台風23号で倒伏や茎葉の損傷で着莢数の減少や登熟不良が多く、扁平粒も多く認められた。長崎県では、開花時期の台風15号で五島地域が被害をうけ、その後、台風16号が県東南と壱岐、台風18号が県本土を縦断し、茎葉の傷害や倒伏、落花、落莢で大きな被害をもたらした。熊本県では、台風16号、台風18号および台風21号で大きく倒伏、大分県では、8月中旬以降の日照不足と台風16号、台風18号、台風21号および台風23号による倒伏が多発し、着莢も不良で収量が低下するとともに

に成熟期の遅れが認められた。宮崎県では、開花期の台風16号で着花数が減少するとともに茎葉の裂傷も生じた。その後、9月上旬に台風18号の直撃で着莢飛散や茎の裂傷がひどく、更に莢肥大期や登熟期の台風21号および台風23号の暴風雨で作柄は平年より著しく劣った。鹿児島県でも台風16号、台風18号、台風21号および台風23号による風害等で倒伏および葉の損傷が多く、着莢数および百粒重ともに小さくなり極低収となった。各県の病害虫の発生については、台風による葉焼病が多発し、また、ハスモンヨトウやカメムシ類も平年より多く認められた。以上のように九州各県とも相次ぐ台風による被害で作況指数は九州で40となり全国の69を下回った。

（九州沖縄農業研究センター作物機能開発部 中澤芳則）

## 〔さとうきび〕

### 1. 作付の概要

鹿児島県の2003/2004さとうきび年期の収穫面積の県合計は9,885ha、前年比100.1%で前年並みであった。種子島は前年と同じ、奄美大島、喜界島及沖永良部島は増加し、徳之島、与論は減少した。作型では春植え21.9%、夏植え22.5%、株出し55.70%であり、前年と同程度の構成比であった。品種の構成ではNiF8、F177が減少し、Ni17が増加した。沖縄県の収穫面積は県合計13,959ha、前年比100.5%であり、前年と同程度であった。沖縄本島地域、八重山地域で減少したが、宮古地域で増加した。作型では夏植えが減少し、春植え、株出しが増加した。構成比は春植12.5%、夏植44.4%、株出し43.1%であった。品種の構成ではNCo310、NiF8、F177が減少し、Ni15の普及が進んでいる。分蜜糖の製造は種子島で始まり（2003.12.16）、喜界島で終了した（2004.04.25）。

### 2. 作柄の概況

鹿児島県では7月の大島地域の干ばつ、台風10号、15号の影響により、10アール当たり収量は史上最低の前年より増加したものの、県平均は5,642kg、前年比107.9%に留まった。10アール当たり収量の増加にともない生産量も増加し、県合計は前年比108.0%、557,666tであった。甘蔗糖度の県平均は14.13%であり、前年よりやや高く、14.4%以上の原料は全体の42.1%を占め、前年よりやや増加した。沖縄県では10アール当

### 2003/2004年期の沖縄、鹿児島両県のさとうきび生産実績

2004年産大豆作付面積と収穫量

区分	作付面積 (ha)	10a		作況 指数	前年との比較					
		当たり 収量 (kg)	収穫量 (t)		作付面積 対差 (ha)	対比 (%)	10a 当たり収量 対差 (kg)	対比 (%)	収穫量 対差 (t)	対比 (%)
全国	136,800	121	165,400	69	△15,100	90	△31	79	△66,800	71
九州計	24,000	76	18,200	40	△1,900	93	△74	51	△20,700	47
福岡	8,140	69	5,620	35	△430	95	△72	49	△6,480	46
佐賀	7,780	96	7,490	48	△990	89	△65	60	△6,610	53
長崎	762	83	632	52	△56	93	△35	70	△333	65
熊本	3,230	74	2,400	38	△290	92	△100	43	△3,720	39
大分	3,150	51	1,610	34	△50	98	△68	43	△2,200	42
宮崎	542	47	257	28	△28	95	△127	27	△737	26
鹿児島	441	47	207	28	△35	93	△114	29	△559	27

県別	年次	農家 戸数 (戸)	収穫 面積 (ha)	10a	収穫量 (t)	産糖量* (t)	分蜜糖 歩留り (%)
				当たり 収量 (kg)			
鹿児島	03/04	10,800	9,885	5,642	557,666	68,991	12.39
	02/03	10,888	9,876	5,227	516,264	61,997	12.01
前年比(%)		100.3	100.1	107.9	108.0	111.3	103.2
沖縄	03/04	18,212	13,959	5,945	829,844	99,212	11.82
	02/03	18,741	13,894	5,830	810,050	97,847	11.89
前年比(%)		97.2	100.5	102.0	102.4	101.4	99.5
両県計	03/04	29,012	23,844	5,794	1,387,510	168,203	12.11
	02/03	29,629	23,770	5,529	1,326,314	159,844	11.92
前年比(%)		97.9	100.3	104.8	104.6	105.2	101.6

注) \* : 含蜜糖を含む生産量。  
さとうきびおよび甘ん糖生産実績（鹿児島県、沖縄県）より編集。

たり収量の県平均は干ばつと台風14号の影響により5,945kg、前年比102%に留まった。生産量は沖縄本島地域で前年比116.9%と大幅に増加したが、宮古地域で98.6%、八重山地域は77.5%と減少し、県合計は前年比102.4%、829,844 tとやや増加した。甘蔗糖度の県平均は14.06%で、前年より低くなり、14.5%以上の原料は39.0%と前年より減少した。

（九州沖縄農業研究センター作物機能開発部 氏原邦博）

## 【野 菜】

### 1. 概 況

平成16年は、竜巻や度重なる台風により施設栽培および露地栽培とも大きな影響を受け、栽培施設に対する被害も大きかった。また、全般に高温乾燥気味に推移したことから、コナジラミ、ハモグリバエ、アザミウマ類等害虫発生が多かった。

### 2. 果菜類

#### 1) イチゴ

品種動向：福岡は「あまおう」（平成16年度産系統共販の93%）、佐賀は「さがほのか」（同85%）に更新が進み、長崎は平成16年度から3年間で「さちのか」に大幅転換の予定だが（同45%）、熊本、大分、鹿児島では依然として「とよのか」が主力である。

平成15年度産：おおむね順調な生育で推移したが、1月下旬～2月上旬に低温の影響で着果がやや不良になり、また3月中旬以降は平年を上回る気温が続いたため、品質低下から切り上げを早める産地が多かった。

平成16年度産：8月までは天候に恵まれて順調に経過したが、8月末からの度重なる台風により育苗施設や苗に被害を受けて炭そ病の発生がみられ、また圃場準備の遅れから定植が大幅に遅れたため、年内出荷量は大幅に低下した。

#### 2) トマト

促成栽培（福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎）：「ハウス桃太郎」「AS-73」等が栽培されている。平成15年度産は年内の高温により一部産地で中段の着果不良や乱形果がみられ、また生育が前進化して収穫終了が早まる傾向にあった。平成16年度産はトマト黄化葉巻病対策のため播種期を遅らせたこと、コナジラミ回避対策のための細目ネットにより育苗中が高温となり花芽が遅れ気味であったこと、また台風により施設や植物体に被害を受けたことが重なり出荷期が大幅に遅れた。

夏秋栽培（大分）：定植後の天候に恵まれ、着果良好で生育は順調であったが、8～9月の台風により大きな被害を受けて栽培を中止する農家もあり、生産量は大幅に減少した。

トマト黄化葉巻病：防虫ネットや薬剤防除の徹底により被害回避に努めているが、発生地域は九州全域で拡大している。

#### 3) ナス

促成栽培（福岡、佐賀）：「筑陽」の接木栽培（台木品種「台太郎」「トナシム」「トレロ」等）が行われている。平成15年度産は11月の曇天と成り疲れから12月下旬～1

月にかけて収穫量が低下し、その後は順調な収穫が続いたが、6月以降の高温によりつや無し果や赤果が多発した。平成16年度産は台風のため定植遅れや茎葉の損傷がみられたが、その後ほぼ順調な回復がみられる。コナジラミ類やハモグリバエの発生が多かった。

#### 4) ピーマン

促成栽培（宮崎、鹿児島）：平成15年度産は暖秋・暖冬の影響で出荷量は前年より多かった。平成16年度産は台風の被害があったが、その後ほぼ順調な回復がみられる。うどんこ病やアザミウマ類等の発生がみられ、宮崎県では「黒枯れ病（仮称）」が発生した。

夏秋栽培（大分）：好天に恵まれ生育は順調に推移したが、高温による日焼け果やうどんこ病、スリップス等が発生した。8月後半の台風により雨よけ栽培では大幅に減収した。

#### 5) キュウリ

促成栽培（宮崎）：生育は全般的に順調であったが、収穫期にべと病やうどんこ病の発生がみられた。

抑制栽培（佐賀、宮崎）：台風による定植準備の遅れ、ハウスやビニルの破損、9月～10月の高温等により全体的に生育が遅れ、年内の出荷量は前年に比べて減少した。宮崎ではZYMVによる萎凋症、佐賀では黄化えそ病の発生がみられた。

夏秋栽培（大分、宮崎）：8月中旬までは天候に恵まれ生育が1～2週間ほど前進化したが、やや乾燥気味で一部の産地で葉焼けがみられた他、うどんこ病やべと病等の発生が多かった。8月後半以降の台風によりほとんどの栽培が終了した。

#### 6) スイカ

熊本、大分：春夏栽培では、育苗期から生育期にかけて天候に恵まれ、生育は1週間程度前進化し、着果・肥大も順調に推移した。3月中下旬と4月下旬に2次肥大による果形の乱れ、5月下旬の曇天による糖度低下がみられたが、全体的に食味は良好であった。

沖縄：促成栽培では、定植直後の10月中下旬に台風の被害を受け、植え替え等により年内出荷の減少と出荷時期の遅延がみられる。品種は「まつりばやし777」が主体である。早熟および普通栽培ではミナミキイロアザミウマにより媒介される灰白色斑紋病が多発した。

#### 7) メロン（熊本）

春夏栽培：天候に恵まれ育苗期から定植初期に1週間から10日ほど生育が前進化した。2月下旬から3月上旬に寒波の影響で初期肥大不良やヒルネットの発生等がみられ、3月末までは小玉果で推移したが、その後の天候回復により熟期が1週間ほど早まった。

秋冬栽培：8～9月の台風で大きな被害を受け、年内生産は大幅に減少した。10月以降に定植したものに黄化葉症の発生がみられ、一部の産地で大きな問題となった。

#### 8) カボチャ（鹿児島）

春栽培：4月下旬～5月中旬まで天候が悪かったため、2番果が着果不良の産地もあった。その後は天候に恵まれ、生育と果実肥大は良好であった。本年度は輸入が前年度より20%以上少なかったことから、前年度よりも単価高で推移した。

秋栽培：相次ぐ台風の被害を受け栽培面積は計画を大

幅に下回った。茎葉の折損等もあり、着果不良、小玉傾向で単収も低かった。

#### 9) ニガウリ

沖縄：平成15年度産促成栽培では、年内は気象条件に恵まれ順調に推移したが、1月中旬から2月下旬までの低温・寡日照で着果不良となり大きく減収した。平成16年度産普通栽培では、新品種「島風」の普及や栽培面積の拡大により、前半は出荷量が増加したが、夏場以降は相次いだ台風により減収した。促成栽培では、10月中下旬の台風により植え付けが遅れているものの、11～12月の気象条件に恵まれ生育は順調である。

長崎：イチゴ後作に島原地域等で施設ニガウリが導入され、県内各地に拡大している。

#### 10) サヤインゲン

長崎：露地抑制栽培が主体だが、ハウス抑制栽培による継続出荷も一部にみられる。品種は「サーベル」「ステイヤー」「スーパーライト」等である。単価は比較的堅調であるが、平成15年度産は微減であり、平成16年度産は干ばつによる圃場準備の遅れおよび台風被害により大幅減収の見込みである。

沖縄：平成15年度産は、11～12月にシルバーリーフコナジラミの加害による白莢の多発、11月の高温による落花や不稔莢の発生が見られ、品質・収量とも低下した。1月以降は比較的順調な生育となり、ほぼ前年並みの作柄であった。平成16年度産は、10月中下旬の台風による植え替えや播種遅れ等により、年内出荷量が減少した。

#### 11) ソラマメ

鹿児島：平成15年度産は、1月中旬まで暖冬により出荷量が多かったが、2月の寒波で減少した。12～1月までシミ症の発生が見られた。平成16年度産は、台風による播種の遅れ、茎葉の折損や塩害、病害の発生がみられ、一部の産地では播き直しも行われたが、栽培面積は減少した。11月下旬からの出荷となり、暖冬のため出荷数量は前年並である。

長崎：五島を中心に島原や平戸で産地が拡大してきたが、近年は鈍化傾向にある。平成16年度産は、台風による初期生育不良や定植期の遅れのため、春期の出荷遅延が予想される。品種は「陵西一寸」で、現行のU字四本仕立に代わりL字三本仕立が増加している。

#### 12) 実エンドウ（鹿児島）

平成15年度産は、暖冬傾向により1月の出荷量は多かったが、2月の寒波により低下し、出荷数量は前年度より微減であった。平成16年度産は、播種はほぼ例年並みであったが、台風による茎葉の折損や塩害等が発生し、出荷はやや遅れ気味である。

#### 13) オクラ（沖縄）

普通栽培：前半は順調に推移したが、切り戻し後の台風被害により減収・品質低下がみられ、出荷量はほぼ前年並みであった。

### 3. 葉根菜類

#### 1) アスパラガス（佐賀、長崎）

夏どり収穫期および株養成期に台風が度重なり、ビニルの破損や茎葉の傷み、9月以降の茎枯病や斑点病の発生等により、翌年春どり栽培の安定を図るため、9月下旬～10月に収穫を打ち切り、株養成へ移行したほ場が多

かった。7～8月の高温時期に、穂先開き、曲がり茎等が発生しているため、下温対策としてハウス換気の徹底を図っている。

#### 2) ネギ

小ネギ（福岡、大分）：主要品種は、夏作では「FDH」「夏彦」「葉王」等、冬作では「FDH」「雷山」「秀治郎」等である。4月中旬から10月まで平年を大きく上回る高温で経過し、夏場には発芽不良や葉先枯れがみられた。数度の台風により9月中旬から11月は平年を大きく下回る出荷量となった。主産地では防虫ネットの導入が進んでいる。

白ネギ（大分）：8月までは天候に恵まれたが、やや水分不足でシロイチモジヨトウやスリップス等の発生が多かった。8月後半の台風により大きな被害を受け、収穫皆無の圃場もみられた。黄色蛍光灯の利用が試験的に始まったが、高い効果が認められている。

#### 3) タマネギ（佐賀、長崎）

苗の生育はほぼ良好で、定植も順調に行われたが、定植後の高温乾燥により生育がやや緩慢であった。各地域とも機械化定植等省力化技術の普及が進んでいる。

#### 4) ブロッコリー

長崎：県北地域や壱岐で拡大しているが、台風により年内出荷はかなり減少した。

#### 5) ニンジン（長崎）

平成15年度産は、10月からの干ばつにより形状・品質が低下した。平成16年度産は、台風により作付面積が大幅に減少した。品種は「向陽2号」を主体として、作型分散のため「紅楽」「黒田5寸」等も栽培されている。一部産地に生育障害（寸詰まり症とよばれる短根ニンジン、豚鼻症状を呈する変形ニンジン）の発生が見られる。コート種子の利用が進んでおり、シーダーテープも一部で導入されている。

#### 6) ダイコン（宮崎）

加工用（生漬け、干し漬け、切り干し）が主体である。9月上旬から10月上旬の播種期に台風が度重なり、播き直しを余儀なくされた。茎葉も損傷を受けたが、心葉が健全な株は予想以上に回復が見られた。季節風が弱く干し作業は遅れ気味であった。

#### 7) バレイショ

長崎：春作では3月上旬に霜害があったが、その後の天候回復によりほぼ前年並みの出荷であった。秋作は台風の影響で小玉傾向であり、平年の6～7割作の見込みである。年明け抑制栽培の生育が良くない。新品種「アイユタカ」の普及を促進中である。

鹿児島：品種は「ニシユタカ」「メークイン」が主体で、熊毛および大島地区とも天候に恵まれ、生育は順調である。

#### 8) サトイモ（宮崎）

梅雨明け後の干ばつと秋の台風による茎葉の傷みが激しかった。早生種では8月中旬以降に水晶芋の発生がみられ、中生種では芽つぶれ症が発生した。

（九州沖縄農業研究センター野菜花き研究部 望月龍也）

## 〔果 樹〕

### 1. 常緑果樹

#### 1) 温州ミカン

発芽期は福岡県、佐賀県で平年より6～7日、大分県、宮崎県で1～2日早かったが、長崎県、鹿児島県で3日程度、沖縄県で7日遅かった。開花期はいずれの県でも平年より4～8日早かった。着花量は極早生温州、早生温州が福岡県のやや少を除き、平年並みから多、普通温州が平年並みであった。生産量は沖縄県の「日南1号」が台風被害により不作（前年対比66%）となったのを除き、極早生温州が平年並みからやや不作、早生温州、普通温州がやや不作となり、高品質果実生産のための仕上げ摘果の徹底と台風被害がこの原因として挙げられる。

果実肥大は全般的に平年並みから良であり、着色も平年並みであった。成熟期は福岡県、宮崎県で6～10日早く、熊本県で5日程遅くなった品種があったが、おおむね平年並みとする地域が多かった。糖度は0.5～1.5度低い県が多かったが、減酸は全ての県で早く、そのため、食味はやや不良から良の範囲であった。外観は台風被害による風ズレの発生により、不良からやや不良であった。

病害虫に関しては、成熟期以降の多雨により黒点病の後期感染、かいよう病および褐色腐敗病の発生が多とする県が多かった。カメムシ類、チャノキイロアザミウマは8月前半までその発生がやや多とする県があったが、その後は発生数は減少した。鹿児島県南部地域でミカンサビダニの多発生が認められた。

#### 2) 中晩生カンキツ

発芽期は福岡県で3～8日早かったが、他県では平年並み、開花期はいずれの県においても4～8日早かった。着花量はいずれの品種も平年並みからやや多であったが、収量はやや不作から平年並みであった。

果実肥大は全般的に平年並みから良、着色も平年並みであった。成熟期は熊本県の「不知火」の平年並み以外は、5日程度早かった。糖度は各品種とも低から平年並み、減酸は早く、食味はアマナツ、イヨ、「不知火」がやや不良、ポンカンが平年並みから良であった。着色は各品種とも平年並みかやや遅く、外観は台風による風ズレの発生で不良とする県が多かった。病害虫の発生状況は、温州ミカンとほぼ同様であった。

#### 3) その他

ビワの生産量は不作で、その前年対比は長崎県で65%、鹿児島県で76%であった。開花期はやや早く、成熟期も5～6日早かった。糖度は平年並みから高く、減酸、食味、外観は平年並みであった。長崎県で果実成熟期の高温による生理障害「シナビ果」が多発した。また、2004年1月下旬の寒害による幼果の果皮障害が発生した。病害虫では長崎県で灰斑病、がんしゅ病、ナシヒメシクイがやや多、鹿児島県でたてばや病がやや多の発生であった。

### 2. 落葉果樹

#### 1) ナシ

発芽期は福岡県を除いて3～10日早く、開花期は全県で平年並みから10日程度早かった。そのため、成熟期も

平年並みから10日程度早かった。着花、果実肥大はおおむね平年並みであったが、果実収量は大分県「新高」の不作（前年比60%）を除いて、平年並みであった。糖度、食味は平年並みであったが、着色はやや早かった。生理障害として、「新高」にみつ症果の発生がみられた。病害虫では黒星病がやや多、ナシヒメシクイがやや多の発生であった。

#### 2) ブドウ

発芽期は大分県「巨峰」の8日遅れ以外は平年並みから5日早く、開花期は全県で平年並みから9日早かった。そのため、成熟期も平年並みかそれより早くなり、15日も早くなった県があった。果実収量は平年並みから不作であった。果実肥大は平年並みから不良であったが、糖度は高く、食味は良であった。着色は早いとする県が多かった。外観は平年並みからやや不良であった。生理障害の発生は特になかったが、病害虫ではべと病、褐斑病、チャノキイロアザミウマの発生が多とする県があった。

#### 3) その他

カキは収量が平年並みから不作であった。開花期、成熟期は平年並みからやや早、着花は平年並みからやや多であった。果実肥大は平年並みから良であったが、糖度は低く、食味はやや不良であった。外観は風ズレにより不良であった。生理障害としてヘタスキ果がみられた。病害虫では、開花期から落弁期の灰色かび病、秋季の炭疽病の発生、春先のカメムシの発生がみられた。

モモは平年並みからやや不作であった。発芽期は平年並みであったが、開花期は平年並みから8日早かった。糖度は平年並みかそれより高く、食味も平年並みから良であった。果実肥大も平年並みから良で、着色は平年並みであった。6～7月にカメムシの被害がみられたが、他には目立った病害虫、生理障害の発生はなかった。

クリは開花期が平年並みであったが、成熟期は5～10日早かった。果実肥大は良であったが、収量は不作であった。病害虫では、クスサンの発生がやや多であった。キウイフルーツは不作であった。果実肥大は平年並みから良であったが、糖度が低く、食味、外観もやや不良であった。花腐細菌病の発生が多とする県があった。

### 3. 熱帯果樹

#### 1) バイナップル

果実肥大は平年並み、成熟期は約7日早く、作況は平年並みであった。糖度、果実品質も平年並みであった。目立った病害虫の発生はなかった。

#### 2) マンゴー

生育・肥大ともに平年並みであったが、収量はやや多かった。成熟期は7日ほど早かったものの、果皮色がやや淡く、糖度も1～2度低下して食味はやや劣った。宮古地域でアルカリ障害による葉の黄化症が発生した。炭疽病、軸腐病の発生がみられた。

（果樹研究所カンキツ研究部口之津 今田 準）

## 〔茶〕

本年は、春先の低温により主産地で一番茶が減産となった反面、緑茶ドリンク等の需要に支えられて茶価が堅調に推移し、二番茶以降の生産が増加した。しかし、台風の上陸が多く、南九州や沖縄で幼木園を中心に潮風害が発生した。第1表に九州における主要産地の‘やぶきた’作況試験園のデータを抜粋して示し、以下に茶期毎の概況を記す。

## 1. 一番茶

九州のほとんどの主要産地で、気温が1月は平年より低く、2月は高かったが、3月以降萌芽期までは平年より低い地域と高い地域に分かれ、低く推移した地域では、萌芽が例年より遅れた。萌芽期以後摘採期までは多くの産地で高めに推移したが、低温で生育が緩慢となった時期もあった。また、4月上・下旬に気温の低い日があり、山間部では霜害も見られた。降水量は萌芽期以後各地とも少なかった。作況試験園の摘採期はほぼ平年並みで、収量も平年並みのところが多かったが、周辺の農家では、低温の影響で減産となったところが多かった。長崎県の作況試験園で、平年より大幅な収量減となっているが、これは、昨年深刈り更新を行った結果、芽重型の大きな芽となり、摘採を早めたことによるもので、通常の出開度で摘採していれば、ほぼ平年並みであったと考えられる。なお、病害虫では、カンザワハダニが各地で多く発生し、一部では被害も見られた。

## 2. 二番茶

ほとんどの主要産地で、5～6月の気温は高めに推移し、降水量は、宮崎県を除けば、5月は多く、6月は少なかった。多くの産地の生育は順調で、摘採期も平年並みかやや早まり、収量も平年より増加した。しかし、宮崎では、生育期に降雨が少なかったこともあり、収量減となった。病害虫では、チャノキイロアザミウマの発生が見られたが、大きな被害はなかった。

## 3. 三番茶

二番茶摘採後の気温は、各地とも高めに推移し、降水量は少なかった。摘採期は平年よりやや早く、収量は平

年より増加した。病害虫では、チャノキイロアザミウマ等の発生が見られた地域もあったが、被害はなかった。

（野菜茶業研究所茶業研究部（枕崎）吉富 均）

## 〔畜産〕

2004年2月1日現在の九州・沖縄地域における家畜別飼養頭羽数および飼養戸数は表に示すとおりである。

## 1. 乳用牛

九州・沖縄地域の乳用牛の飼養頭数は160.8千頭で、前年度より1%減少した。九州は153.5千頭で微減、沖縄県で270頭減少の7,260頭である。全国では169.0万頭と前年比1.7%の減少を示した。九州・沖縄地域で飼養頭数の多い上位3県は前年同様、熊本県（51.0千頭；九州の33%）、福岡県（23.2千頭；同15%）、宮崎県（21.1千頭；同14%）である。

九州・沖縄における乳用牛飼養農家戸数は3,110戸で、前年より110戸減少した。飼養農家1戸当たりの飼養頭数は49.6頭で、前年より1.3頭増加した。九州各県の1戸当たり飼養頭数は49.4頭、沖縄県で54.2頭と全国平均頭数58.7頭より少ないが、北海道の95.6頭を除けば東海地域（60.7頭）に次ぐ頭数規模となっている。

飼養戸数の減少は、例年のように飼養者の高齢化と後継者不足等により、20～39頭規模の飼養者を中心に中止があったが、一方では規模拡大を行う飼養者がみられたこと等から前年並みの頭数であった。

乳用牛に関する研究については、夏期における乳量・乳質低下防止のための暑熱関連遺伝子の発現とその制御に関する研究、高泌乳牛の生涯生産性について飼料イネや食品副産物等を利用する混合飼料（TMR）給与、子牛の哺乳技術やロボット搾乳の導入に関する研究が各県で精力的に進められている。

## 2. 肉用牛

九州・沖縄における肉用牛の飼養頭数は、1,939千頭で前年に比べて4千頭（0.5%）増加した。飼養頭数の多い上位3県は前年同様、鹿児島県（349千頭）、宮崎県（267千頭）、熊本県（150千頭）であり、この3県で九州・沖縄全体の70%を占める。九州・沖縄は肉用牛の中で乳用種の占める割合が最も低い地域であるが、その割合は17.6%（19.3千頭）で、前年よりやや減少した。福岡県は例外で、乳用種の頭数割合が14.5千頭で43.1%を占めている。

用途別飼養割合は、肉用種雌牛の割合が高く53.6%（586千頭）と前年とほぼ同様である。肉用種子とり用雌牛飼養頭数の全国に対する九州・沖縄の割合は54.7%であった。一方、九州・沖縄の肉用種肥育牛は、315千頭で全国比では49.5%を占めるが、そのうち、交雑種は128千頭と40.7%である。肉用牛飼養農家戸数は、44,970戸であり、前年より1,670戸と大幅な減少（-3.6%）を示し、全国ベースの-4.3%と同様に減少傾向が続いている。1戸当たり平均飼養頭数は、飼養農家戸数の減少に伴って増加し24.3頭で、前年より1.0頭増加した。全国の1戸当たり平均飼養頭数は29.9頭であり、九州・沖縄地域の飼養規模は全国よりも小さいのはこの

第1表 作況試験園における収量等

産地名	年度	一番茶		二番茶		三番茶		
		萌芽 (月/日)	摘採日 (月/日)	収量 (kg/10a)	摘採日 (月/日)	収量 (kg/10a)	摘採日 (月/日)	収量 (kg/10a)
福岡 (八女)	本年	4/5	5/2	685	6/18	673	—	—
	前年	4/1	4/29	578	6/13	475	—	—
	平年	4/3	5/2	574	6/17	435	—	—
佐賀 (嬉野)	本年	4/6	5/2	645	6/16	687	—	—
	前年	4/3	4/27	586	6/11	622	—	—
	平年	4/4	5/2	614	6/17	625	—	—
長崎 (東彼杵)	本年	4/5	5/2	461	6/16	315	7/22	291
	前年	4/3	4/29	516	6/13	322	—	—
	平年	4/4	5/2	602	6/18	379	7/24	300
宮崎 (川南)	本年	4/5	5/1	681	6/9	612	7/13	584
	前年	4/1	4/25	653	6/9	508	7/16	385
	平年	4/1	4/28	707	6/9	742	7/14	442
鹿児島 (知覧)	本年	3/28	4/25	521	6/8	604	7/16	510
	前年	3/28	4/22	649	6/2	388	7/10	324
	平年	3/31	4/27	598	6/11	497	7/18	384
鹿児島 (大隅)	本年	3/31	4/24	704	6/4	634	7/12	444
	前年	3/31	4/21	629	5/30	595	7/9	434
	平年	3/31	4/25	626	6/8	454	7/15	341



家畜飼養頭羽数および飼養農家戸数（2004年2月1日現在）

		乳用牛	肉用牛	豚	採卵鶏	ブロイラー
飼養頭羽数	全 国	169.0万 (-1.7%)	280.5万 ( 0%)	972.4万 ( 0%)	13,722万 ( 0%)	10,495万 ( 1.2%)
	九 州	153,500 (-0.9%)	1,014,000 ( 0.7%)	3,019,000 ( 3.0%)	2,159万 ( - 3.9%)	4,764万 ( 3.1%)
	沖 縄	7,260 (-3.6%)	79,400 (-2.0%)	269,900 (-6.8%)	128万 ( - 1.2%)	*
	九州+沖縄	160,760 (-1.0%)	1,093,400 ( 0.5%)	3,288,900 ( 2.1%)	2,287万 ( - 3.6%)	*
農家戸数	全 国	29,800 (-3.4%)	93,900 (-4.3%)	8,880 (-5.8%)	4,090 ( - 5.8%)	2,778 (-2.1%)
	九 州	3,110 (-3.4%)	41,600 (-3.7%)	2,540 (-3.4%)	804 ( - 1.6%)	1,082 ( 0%)
	沖 縄	134 (-4.3%)	3,370 (-2.0%)	373 (-9.0%)	76 ( -15.6%)	*
	九州+沖縄	3,244 (-3.5%)	44,970 (-3.6%)	2,913 (-4.2%)	880 ( - 3.3%)	*
一戸当たり頭数	全 国	58.7 ( 1.0頭)	29.9 ( 1.3頭)	1,095 ( 64頭)	33,549 ( 1,920羽)	37,779 (1,241羽)
	九 州	49.4 ( 1.3頭)	24.4 ( 1.1頭)	1,193 ( 79頭)	26,853 ( -513羽)	44,030 (1,410羽)
	沖 縄	54.2 ( 0.4頭)	23.6 ( 0.1頭)	724 ( 17頭)	16,800 (-1,422羽)	*
	九州+沖縄	49.6 ( 1.3頭)	24.3 ( 1.0頭)	1,129 ( 70頭)	25,989 ( -473羽)	*

注) a) ( )内は対前年に対する増減(%,もしくは増頭羽数)。  
 b) 採卵鶏の飼養戸数は、種鶏のみの飼養者を除き、1000羽以上の飼養戸数。羽数は、種鶏を除く成鶏。  
 c) 資料は農林水産統計情報(平成16年5月31日, 7月2日, 8月3日, 8月17日, 10月26日・農林水産省統計情報部, 沖縄総合事務局公表)による。  
 d) \*沖縄県のブロイラーについては公表されていない。

地域で繁殖雌牛飼育経営が多いことによる。各畜種とも飼養戸数および飼養者は、飼養者の高齢化と後継者不足等により小規模飼養者を中心に飼養中止が続いている。乳用牛と同様に、BSE発生の影響による出荷頭数の減少から、飼養頭数はわずかに増加した。

肉用牛に関する研究では、転作水田等遊休農地を活用した稲発酵粗飼料等の自給飼料利用による肉牛生産に関する研究や、粗飼料機能を活かした機能性畜産物作出研究が行われている。また、肉用繁殖牛の周年放牧技術も進められ、その他、食品製造残渣等の副産物利用、交雑種飼養、早期肥育技術の開発、胚移植技術の高度化、受精卵ならびに体細胞クローン牛の作出に関する研究なども精力的に実施されている。

### 3. 豚

2004年2月1日現在の九州・沖縄における飼養頭数は328.9万頭で、前年比6.8万頭(+2.1%)と増加した。飼養頭数の多い上位2県は前年同様、鹿児島県(137.8万頭)、宮崎県(86.4万頭)であり、九州・沖縄の飼養頭数の68.2%を占めている。このうち、鹿児島県は対前年度8.5万頭、宮崎県が1.0万頭増加している。これはBSEの発生により牛肉消費不振があり、豚肉の代替需要が高まったことによる頭数増である。

飼養農家戸数は、全国で8,880戸、九州・沖縄では2,540戸であり、中小規模が減少したのに対し、大規模農家は増加している。九州・沖縄での1戸当たり飼養頭数は1,127頭(前年比6.4%)で大幅に増加した。特に飼養規模の大きな県は鹿児島県(1,403頭)、大分県(1,318頭)、宮崎県(1,183頭)で、前年度より200~100頭程度の増加を見せ、大規模経営化が進んでいることを伺わせる。反面、飼養戸数の減少は、飼養者の高齢化と後継者不足および都市部を中心にふん尿処理等による環境問題での飼養中止等に基づく。

九州各県では品質に優れ、より機能性を高めた銘柄豚を生産するための系統豚の造成を進めている。また、窒素・燐、亜鉛・銅等の環境負荷物質排泄の低減技術や糞尿処理技術、体外受精等のバイオ技術の開発等に関する研究が実施されている。

### 4. 採卵鶏

成鶏飼養羽数(種鶏を除く)は2,287万羽で前年に比

べて166万羽の減少(-3.6%)を示した。飼養羽数の多い県は、鹿児島県(805万羽)、福岡県(372万羽)、宮崎県(343万羽)で、これらの3県で、九州・沖縄の全飼養羽数の66.4%を占めた。九州・沖縄での飼養戸数は880戸、そのうち、成鶏雌1000羽以上を飼養するのは820戸である。1戸当たりの成雌飼養羽数は25,989羽と、前年に比べて1.7%増加した。1戸当たりの羽数は宮崎県(32,638羽)鹿児島県(30,489羽)と宮崎県がトップとなっている。飼養戸数の減少は、1万羽未満の小規模飼養者階層での減少傾向が見られる。高病原性鳥インフルエンザによる飼養頭羽数への影響については平成15年度の統計情報では現れていない。

採卵鶏に関する研究については、カテキン等の鶏卵の高付加価値化に及ぼす研究、鶏舎環境改善、環境負荷物質排泄の低減技術の研究などが各県で精力的に進められている。

### 5. ブロイラー

2004年は沖縄県におけるブロイラーの羽数等については公表されていない。2月1日現在の九州におけるブロイラーの飼養羽数は4,764万羽で前年に比べて3.1%増加した。全国の飼養羽数に対する九州の飼養羽数割合は45.4%と非常に高い。飼養戸数は1,082戸で、前年度並みである。1戸当たりの飼養羽数は九州全体で44,030羽で、鹿児島県、宮崎県の両県における飼養羽数が飛び抜けて多く、この両県で九州の全飼養羽数の76.2%を占めている。1戸当たりの飼養羽数の多い県も、鹿児島県(51,836羽)、宮崎県(44,079羽)である。

ブロイラーの全国の出荷羽数は5億9528万羽で、そのうち九州は2億6,996万羽で、前年比4.0%の増加を示した。これは、鶏肉需要に支えられ、大規模階層での出荷羽数増があったためである。

ブロイラーに関する研究では、天草大王等の新特産鶏の復元や特産鶏の価値を高めるための新たな肉質評価法の開発、飼養管理の工夫による環境負荷物質低減に関する研究等が進められている。

(九州沖縄農業研究センター畜産飼料作研究部 假屋堯由)



2004年度産の主要飼料作物の作付け面積と収穫量

県名	飼料作物 計 (ha)	牧草		青刈りトウモロコシ		ソルゴー		青刈りえん麦	
		面積 (ha)	収穫量 (t)	面積 (ha)	収穫量 (t)	面積 (ha)	収穫量 (t)	面積 (ha)	収穫量 (t)
福岡	2,610	1,840	107,300	140	5,290	359	21,800	31	...
佐賀	1,850	1,140	70,200	50	2,140	489	27,900	142	...
長崎	9,010	4,980	283,400	920	42,000	2,270	137,100	616	29,000
熊本	21,200	13,400	595,300	4,720	223,700	1,420	88,800	204	7,710
大分	8,370	5,740	299,400	1,200	55,800	1,080	64,800	103	...
宮崎	31,400	16,600	1,047,000	7,190	338,600	4,670	249,800	1,400	37,400
鹿児島	31,300	20,600	1,439,000	3,460	197,600	3,200	218,200	3,070	124,900
沖縄	5,470	5,440	631,000	...	...	13	1,230	...	...
計	111,210	69,740	4,472,600	17,680	865,130	13,501	809,630	5,566	199,010

注) 農林水産省大臣官房統計部 平成16年12月22日公表。

## 〔飼料作物〕

### 1. 作付面積

2004年の九州沖縄地域における飼料作物の作付面積は、牧草類（イネ科・マメ科の永年生、1年生を含む）が69,740ha、青刈りトウモロコシが17,680ha、ソルゴーが13,501ha、青刈りえん麦が5,566haであった。飼料作物合計は111,210haであった。作物別では前年と比較して、牧草類が460ha（0.7%）減、青刈りトウモロコシが1,329ha（7.0%）減、ソルゴーが389ha（2.8%）減、青刈りえん麦が90ha（1.6%）増であった。

### 2. 作況

牧草：収穫量は4,472,600tで前年度より92,400t

（2.1%）増、10a当たりの収量は前年比103であった。

青刈りトウモロコシ：梅雨期の小雨・高温によって生育が抑制されたが、一方で6月上旬から9月下旬まで連続して九州に上陸あるいは接近した台風によって茎葉の折損や倒伏の被害を受けた。10a当たり収量は前年比95であった。

ソルゴー：梅雨期の干ばつと夏季の台風の影響により生育が抑制され、10a当たり収量は前年比91であった。

青刈りえん麦：生育期間を通じておおむね天候に恵まれ、主産県における10a当たり収量は前年比3,762kg/10a、前年比101であった。

（九州沖縄農業研究センター畜産飼料作研究部 松岡秀道）